

2014年11月23日 礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書 20 章 19～26 節

説教：神のものは神に返しなさい

1 問者たち

1) 義人を装う

イエスは「神のものは神に返しなさい」と語っておられます。いったい何を返したらいいのか。自分は返すべきものをきちんと返していただろうか。少し不安になった方もいるのではないのでしょうか。神のものとはいったい何か。そのことを見てまいります。

律法学者や祭司長たちは、イエスが人々の前で自分たちに恥をかかせるようなことを堂々と教えているのを見て、腹を立て殺そうとしています。でも、民衆はイエスに大きな期待を寄せているので、簡単には手を出せません。そこで、彼らは問者を送ってイエスを殺す口実を見つけることにしました。

「問者」とは、スパイのことです。スパイとは、本当の身分を隠して「私はあなたの味方です」という振りをしながら、裏ではそれとは反対のことをする人たちのことです。

スパイは、21 節でこう言いながら義人を装います。「先生。私たちは、あなたがお話しになり、お教えになることは正しく、またあなたが分け隔てなどせず、真理に基づいて神の道を教えておられることを知っています。」

もちろんこれは嘘で、心ではそんなことは思っていない。

2) 質問の意図

そうしてからスパイはイエスに次のような質問をします。22 節。「ところで、私たちが、カイザルに税金を納めることは、律法に

かなっていることでしょうか。かなっていないことでしょうか。」

イエスを殺す口実を見つけ出すための質問です。それがなぜ税金の話なのでしょう。少し説明が必要です。

もし、ローマ帝国に税金を納めるべきだと答えたとしたらどうなるでしょう。イエスとスパイとして送られてきた人たちの周りにはたくさんの民衆がいます。人々はイエスに大きな期待をかけています。イエスはもう間もなくイスラエルに革命を起し、ローマ軍を追い出してくれるに違いない。そうしたらこの国はもう一度神の国として輝かしい出発をすることができる。そんなふうと思っていますから、人々がイエスに期待する答えは一つです。「税金は納めるべきではない。」

でももしそう答えたならどうなるでしょう。スパイたちは得意になって言うでしょう。おまえはローマ帝国に刃向かい、自分を王としている。そのようにして、ローマの総督に告発する口実をつかむことができます。

では反対に、税金は納めるべきですと答えたならどうなるか。今度は民衆が黙っていません。イエスは裏切り者だと叫び始めるでしょう。

どちらに答えたとしても、イエスは窮地に追い込まれていくしかけになっています。

2 イエス

1) だれの肖像ですか、だれの銘ですか

イエスは彼らの魂胆を最初から見抜いています。まったく別の視点から切り返してい

きます。24節。「デナリ銀貨をわたしに見せなさい。これはだれの肖像ですか。だれの銘ですか。」

デナリ銀貨は、ローマ帝国がしたしたものです。表面にはローマ皇帝の肖像とともに皇帝の名前が彫られていました。人々は答えました。「カイザル皇帝の肖像です。そしてカイザルという名前が彫られています。」そこで、イエスは言います。「カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。」

スパイどもはこれを聞き、何も言えなくなってしまう。では、みなさんはどうでしょう。「すごい答えだ。」と思いますか。確かにすごい答えです。まさかこんな答え方があるとはだれも想像できません。まるで一休さんの答えのようです。でも良く考えていただきたい。イエスは神の子です。神である方が語ることばです。スパイを打ち負かすために考えついた奇抜な答え、ということではないはずです。イエスの語るすべてのことばには深い意味があると考えべきではないでしょうか。

2) 神のかたち、神の銘

ではどんな深い意味があるのか。ヒントはイエスのことばにあります。「これはだれの肖像です。だれの銘ですか。」ここで「銘」ということばについて少し補足しておく必要があるかもしれません。骨董や美術品に興味がある方にはおなじみのおことばだと思います。だれの作品であるのかを記した説明書きと書いていいでしょうか。銘があるかないかで、美術品の価値がまったく違うのだそうです。

デナリ銀貨にはカイザルの肖像と銘があ

る。だったらそれはカイザルのものなのだから、カイザルに返すべきです。そのすぐ後でイエスは続けます。「そして神のものは神に返しなさい。」

デナリ銀貨にカイザルの肖像と銘があるから、返さなければならない。それと同じ論法で、神のものには神の肖像と銘があるから、あなたはそれを返すべきである。そのような内容です。つまり、イエスの目にはスパイたちが神のものを返していない、そのように見えていることになります。

いったい何を返さなくてはならなかったのでしょうか。そもそも神のものとは何のことか。考えなければなりません。イエスは、ヒントを与えておられます。神のものであるなら必ず神の肖像があり、神の銘が彫られている。そのようなヒントです。さて、なんのことなのか。次にそのことを考えていきます。

3 神のもの

1) 神の肖像・かたち

まず「神の肖像」から見ていきます。「肖像」と訳されていることば、ほかの箇所では「かたち」とも訳されていることばです。つまり「神のかたち」です。すぐに、創世記1章27節の「神は人をご自身のかたちに創造された」が思い浮かべます。けれどもそれでは少しわかりにくいので、ずばりわかる箇所を挙げます。コロサイ書1章15節です。「御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものよりも先に生まれた方です。」

神のかたちは、ここでは御子イエス・キリストを指しているのではないか。そんな可能性があります。でも本当にそうなのでしょうか。このことを裏付ける証拠が必要です。裏付けをしましょう。もし本当だということな

ら、神の銘も、イエス・キリストに関係する内容であるはずですが。そのことを次に確かめます。

2) 神の銘

聖書の中に、イエス・キリストの銘が掘られている箇所が出て来るのでしょうか。捜すことができました。イエスが十字架にかけられた場面です。ルカ 23 章 38 節。「これはユダヤ人の王」と書かれた札もイエスの頭上に掲げてあった。」この「札」と訳されているところが、「銘」と同じことばです。新約聖書では、デナリ銀貨の箇所と、十字架に掲げられた札の箇所、そこにしか出てこない、かなり珍しいことばです。こうしてみると、「神の肖像」と「神の銘」、どうもこれはイエス・キリストを指していると考えて間違いなさそうです。

そうすると、「神のものは神に返しなさい」とはどのような意味になるのでしょうか。最後にそれを見ます。

3) 神のものは神に返しなさい

皆さんは最初ここを読んで、漠然と思っていただけないでしょうか。「私たちは全部神からいただいている。自分のものではないのだから神にお返ししなければ。でもいったいなんだろう。お金だろうか。人生だろうか。いのちだろうか。返しなさいと言われても、返したくない。困った。」

前回、イエスが一つのたとえ話を語った所を見ました。ぶどう園の主人は、あるとき愛するひとり息子を農夫たちの所に送るのですが、農夫たちはこう言ったのです。「あれはあと取りだ。あれを殺そうではないか。そうすれば、財産はこちらのものだ。」そうやっ

てひとり息子を殺す場面がありました。ぶどう園は、もともと主人のものでした。それを自分たちのものとするためにひとり息子を殺してしまう。だれが聞いてもひどい話です。この農夫にたとえられている人たちこそ律法学者、祭司長、そして送り込まれたスパイです。

彼らは、神のものである神殿を自分たちのものにしようとしています。神の国であるイスラエルを、自分たちのものにしようとしています。そのために、神のひとり子である方をひどい目に遭わせて、殺そうとしています。神のものを神に返そうとはしません。いや、絶対に返すものか。こいつは俺のものだと言いつ張っています。自分は正しい人間であるかのように義人を装い、イエスを十字架に追いやっていきます。神のものであるぶどう園を横取りして返そうとしない。「神のものを神に返しなさい。」イエスが言われたのはそのような意味です。

私たちはどうでしょうか。神のものを神に返したのでしょうか。私たちも律法学者・祭司長たちと同じように、イエス・キリストを十字架に追いやり、このぶどう園は俺のものだ、神には絶対渡すものかと言いつ張ったのではないですか。

自分は正しい。私は悪い人間ではない。常識をわきまえた良い人です。そんなことを言いながら、心の中では嘘をつき、人を憎み、あんなやつ死んでしまえとつぶやいている。つまり義人を装っていたのではないですか。

イエスはそんな私たちに言われました。「神のものは神に返しなさい。」でもどうですか。返しなさいと言われても、いまさら遅いのでしょうか。すでに主は十字架におつきになったのです。どうすればよい

のでしょう。もし手遅れだというのなら、だれひとり救われる者はいないでしょう。けれども主の救いに、手遅れということはありません。

私は、ぶどう園を独り占めしたいと思っている。ぶどう園を手に入れるために、神のひとり子を十字架に追いやってしまった。イエスが十字架につるされたとき、これですべては自分のものになると喜んでいた者である。

もしそんなふうに告白できるのなら、主は砕かれたたましいを最もすばらしい供え物として受け取ってください。私は義人でも何でもありません。本当にひどい罪人だ、と言って悲しむ者を、主は救ってください。